次の選択肢に進めるような支援を考えることが大切ではないでしょうか。

西脇知事　**京都府では、令和3年に京都経済センター3階に「京都府生涯現役クリエイティブセンター」を設置しましたが、実際に運用を始めると、ミドル世代だけでなく、ちょっと学び直しをしたいという若者や女性のニーズがたくさん寄せられるようになりました。**

京都には34大学、16万人を超える学生さんがいて、祇園祭の山鉾巡行や商店街のイベントなど、若い人がメインプレーヤーとなって京都の文化・経済を支えてくれていますね。また、京都府の北部地域では、一度は就職して首都圏に出たけれど、やっぱり故郷が住みやすいと戻ってきて、家業を継いだり農業を始めたりする若者が増えています。こうした京都が持つ多様な層の厚みの中から、「起業って面白いよね」という人が出てくれば学生ベンチャーもどんどん育っていくんじゃないかと思います。

KOINに求めることは?

■田中　オンラインの時代にわざわざKOINに行く理由って何でしょうか。例えば、学生が買いたくても買えないようなVRゴーグルや3Dプリンター、ドローンみたいなガジェットが揃っていれば、それを試しに来てくれる人も多いんじゃないかと思います。記号化されていない魅力的なもの、大人の児童館とでもいうようなわくわく感を提供できれば、もっとKOINでの交流は広がっていくと思います。

■渡邊　もともと僕は役者をやってて、そこから起業したんだって言うと、多くの学生から「意識高いですね」っていう反応が返ってくるんです。僕は自分のやりたいことに挑戦するというスタンスで生きてきましたが、そうでない学生だって少なくありません。先ほど知事が京都の多様性とおっしゃいましたが、彼らをどのようにこちら側に引き寄せるか…、例えば意識高い系の学生と交流する機会を増やすとか、KOINがその拠点となっていくことを期待しています。

西脇知事　**ドローンがあれば私も飛ばしてみたいですね。ぜひご意見を参考にしたいと思います。KOINは起業を目指す人だけでなく、女性の働き方をサポートしたり、アイデアがないけど何かしたいという人の相談に乗ったり、小学生や中学生のアントレプレナーシップを育んだり、これから京都で新しい一歩を踏み出そうという人たちをオール京都体制で後押ししています。知恵と技術を磨く共創の場として、ぜひ多くの方に活用してもらいたいですね。**

本日は、若く意欲あふれる人たちの感性に触れ、私自身も大きな力を得ました。多難な時代を迎えましたが、集まっていただいた皆さんとともにベンチャーのまち京都の明るい未来を切り拓いていきたいと思います。

西脇知事とのイベントを終えて

ファシリテーター　竹内 弘一

京都を中心に活躍する若手人材と知事が直接意見を交わす貴重な機会となった今回のトークイベントですが、印象的だったのは若手の皆さんが西脇知事に対して遠慮なく意見をぶつけていたことでした。おそらくその率直な意見こそ、西脇知事が今後の府政運営を担う上で、新たな政策を考える上で最も必要とされていたものだったのではないでしょうか?

私は若手のみなさんと知事とのちょうど間の世代だったこともあり、ファシリテーターとして両方のご意見がわかるので非常に興味深い時間を過ごさせていただきました。

KOINは様々な立場の人が、新たな人脈やアイディアを探しに来る場所です。そこに集う起業家や起業を志す学生が活発な意見交換をし、自らのアイディアを披露しながら切磋琢磨することで、京都から新たなビジネスが生まれます。そしてKOINから生まれたビジネスが社会で認識されることで、「その輪に入りたい」とこれまで起業に興味のなかった若者もKOINに集うようになります。そんな好循環を生み出す初めの回転を担っているのが、今回参加された皆様だと思います。行政は様々な補助金や支援を行うことができますが、基本的には若い人たちの邪魔をせずのびのびチャレンジしてもらうことが最も大切なのではないでしょうか?

私たち40代以上の人たちは知事に対して「なんでも意見してもいいよ」と言われても物怖じしてしまってオブラートに包んだ表現になりがちです。しかし、いわゆるZ世代の皆さんは、ストレートに思いを伝えることができます。それこそが世代間の理解を深め、共に新たな時代を切り開いていく原動力になるのではないでしょうか。限られた時間ではありましたが、そんな息吹を感じることができました。

KOINには、今後も行政のトップや財界のトップと若者が忌憚のない意見をぶつけ合える場を作ることが求められます。その機会が多ければ多いほど、たくさんの起業家が生まれ京都がさらなる発展を果たすことができると信じています。

京都知恵産業創造の森
Newsletter 特別号

発　行　日:2022年10月31日
発　　行:一般社団法人 京都知恵産業創造の森
発行責任者:村上 公伸

一般社団法人
京都知恵産業創造の森
〒600-8009 京都市下京区四条通室町東入函谷鉾町78 京都経済センタービル3階
TEL 075-353-2300(代表)　https://chiemori.jp/

京都知恵産業創造の森

CHIE CROSS
ちえクロス
「知恵と融合」から生まれる
未来のイノベーション

2022
特別号

西脇知事と語る会 in Koin

(一社)京都知恵産業創造の森 顧問の西脇知事とKOINでの実施事業に関わってきた若者が、京都の魅力や未来などについて考えるトークセッションを開催しました。
西脇知事からの助言や京都の未来を担う若手メンバーならではの率直な意見を聞く貴重な機会となりました。

※撮影時のみマスクを外して撮影を実施しています。

京都府知事
西脇 隆俊

京都の魅力を探り、KOINから京都の未来を切り拓く

京都には、最先端の技術を持った企業がたくさんあります。その多くが一人の技術者が立ち上げたベンチャーからスタートし、特に明治維新による遷都で京都のまちが荒廃したとき、オンリーワンの技術やサービスを磨き上げることで、京都のまちの復興に大きな力を発揮し、その後世界へと羽ばたいていきました。

一方、現在の状況に目を向けると、コロナ禍の影響は私たちの暮らしにまで及び、加えて人口減少や気候変動など一朝一夕では解決できない課題が目の前に山積しています。大きな歴史的転換点に差し掛かった今、これまで京都経済を支えてくれた企業のさらなる支援と、その後を継ぐような次代の新産業育成を目指して、経済界と一緒になって立ち上げたのが京都経済センターです。なかでも、私が顧問を務め、府・市・会議所・金融機関等の力を結集して設立した「京都知恵産業創造の森」では、学生や女性ベンチャーの支援はもちろん、産学連携の推進、産業人材の育成など様々な取り組みを積極的に行っています。

現在では、スタートアップの数は京都府内で400社以上となり、資産価値が100億円を超えるような企業も増えてきています。また、令和2年7月には、内閣府が推進する「世界に伍するスタートアップ・エコシステムグローバル拠点都市」に京都府が選定されるなど、その成果は徐々に表れつつあります。今後は、スタートアップと世界を結びつけるために、例えば大山崎町に芸術と工学を融合したアート&テクノロジー・ヴィレッジを、京田辺市・精華町にフードとテクノロジーを融合したフードテックの拠点を立ち上げるなど、地域の特性を生かした産業創造の拠点づくりに取り組んでいこうと考えています。

今回、若い起業家の皆さんと意見交換するきっかけをいただいたことに感謝するとともに、未来の京都を切り拓こうとするその熱意を真摯に受け止め、施策や支援でしっかりと応えていくことで、新たなイノベーションにつながる経済・産業を共創していきたいと思います。

あなたが感じる京都の魅力は何？

■鈴田　歴史的に見ても日本で初めて民間発のベンチャーキャピタルが生まれたりして、京都のまちは若く意欲のある人が資金を得て成長していける環境にあふれていると思います。行政や地域社会が横につながって、次の産業を育てていくんだという意気込みを感じます。僕自身、そういう種を探し出してきて、同世代の同じ目線や立場で「俺はこっちで支えるから一緒に頑張ろうぜ」と、その人たちがより成長できる場所、チャンスを得られる場所へと連れていく…、そんなプロデュース業にとても魅力を感じています。

■尹　外国人の立場から京都を俯瞰すると、京都ってとても旅行しやすいまちだなと思う反面、地域の人たちとコミュニケーションが取りにくいと感じることもありますね。京都はインバウンドを受け入れる開放性を持つ一方で、京都ならではの文化を守るために排他的に他の文化を隅に追いやってしまうことがある。開放性と閉鎖性のバランスで成り立っているのが京都の面白さだと思いますが、バランスは常に流動的であり、危うさをはらんでいるのではないでしょうか。もちろん言葉の壁もありますが、京都が持つ開放性が外から来た人に向けられない場面も少なくないように思います。

■宮武　京都の「一見さんお断り」文化って、よそ者を疎外しているようなイメージがありますが、最初によそ者っていうラベルを貼ってもらうことで、むしろあの人は外から来たんだから仕方ないよねって親切にいろんなことを教えてくれたりして、逆に「よそさん」をうまく活用することで観光客や外国人でもコミュニティに受け入れてもらいやすくなるんじゃないかと思います。例えば祇園祭の懸装品など、何百年も前に外国の文化が受け入れられて現在まで伝わっているのを見ると、京都は寛容性の高いまちなんだなと改めて実感させられますね。

西脇知嘉

京都の横のつながり、あるいは受け入れやすさという話が出ましたね。私は特にコンパクトシティと言っていますが、大学も企業も行政もとにかく距離が近いのが京都の魅力だと思っています。さっきまで話してた人と別のところでばったり出会って、そこから「ああ、そういえば…」なんてまた新しい話題が広がっていくこともあります。

京都って、外から来た人のいろんな活力や刺激が混ざり合ってかたちづくられてきたまちなんだと思います。一方で、入口のところで敷居が高いと考える人がいるのも事実。以前、東京に行ったとき、新しい産業を起こしたければ、京都人は英語を喋ればいいんだって言う人がいました。京都で英語を使って生活できるのなら、世界中から優秀な人材やスタートアップが集まってくるでしょう。グローバル社会を迎えた今、コミュニケーションの在り方そのものを考える時期なのかもしれません。

京都の未来に望むものは？

■田中　ついこの前まで、京都のまちではオーバーツーリズムが起きていました。今、アフターコロナを見据えていろんな施策が行われていますが、まずは京都府民の観光リテラシーを高めることが大切だと考えています。オーバーツーリズムを経験した私たちだからこそ、よその観光スポットに出かけたとき、もしかして自分の行動がオーバーツーリズムを起こしているかもしれないと考えて、人が集中している時間帯を外してみるとか、京都の人ってかっこいい旅行者だねっていう認識が広まれば、京都にもかっこいい旅行者が来てくれると思います。

■笠井　農作物に被害を与える鹿や猪の9割以上が捕獲された後、廃棄されているということを学生時代に知って、せめてそれらを食用として使えないかと考えたのが起業のきっかけです。今、世界は食糧危機の課題にさらされていますが、世の中にはこれまであまり活用されてこなかったもの、捨てられていたものに新しい価値を見出して事業を起こそうという人もたくさんいます。環境先進都市として、そんな私たちの思いを後押しするような京都ならではの施策や支援に期待したいですね。

■炭竃　私はシェアハウスの経営に取り組んでいるのですが、留学等で京都に来た海外の人がアパートやマンションを借りられないという話をよく聞きます。せっかく京都のことを魅力的だと思って来てくれたのに、住みたくてもそこに住む環境が整っていないのはとても残念だと思いますね。知事から、外から来た人の活力や刺激が京都のまちを作ったという話がありましたが、国内だけでなく、海外の人たちが共に暮らせるような環境になれば、地域の中からいろんなアイデアが生まれて、京都の将来性が広がっていくんじゃないかと思います。

■渡邊　僕は21歳まで京都で育って、半年前に東京から京都に戻ってきて、京都の零細寺と言われるようなところでいろんなイベントをしているのですが、何百年もそこにある凄さとか目に見えない伝統の重さとか、外から帰ってきたからこそ強く感じることがたくさんあります。京都に住んでいる人は、それが当たり前になって気づいていないのはもったいないと思います。私たちがまず京都で紡がれてきたモノやコトの魅力を再認識し、それを現代ニーズに合った形で未来へつないでいくこと、それが今の京都に望まれていることだと思います。

西脇知嘉

コロナ禍で観光客が減ったとき、いろんなところで「ぜひ京都に来てください」とお願いしていたら、「京都の人もうちへ来てくれるんですよね？」って言われたことがありました。なるほどと。迎える側の心構えばかりでなく、お互い様という気持ち、ツーリストシップというのかもしれませんが、一人ひとりが観光に対する意識を変えていくことがオーバーツーリズムの解決につながっていくのだと思います。

この前、ある会議で2025年に開催される大阪万博の話題が出たのですが、50年前の万博は明らかに技術の展示でしたが、次の万博は人間の感性への訴えかけが大きなコンセプトになっているんです。ただ環境に優しいからとか、土地の価格が安いからということではなく、それこそ若い人たちが中心となって、数値では測れない京都の魅力、これまで育まれてきた文化や精神性をさらに磨き上げることで、住んでみたい、事業を起こしてみたいという人が増えていけばいいと思います。

学生ベンチャーを育てるために必要なことは？

■山内　コロナ禍をきっかけに自分で起業したいという人が増えてきましたが、女性は結婚して出産、子育てするためにまずは安定した仕事に就いて、ゆくゆくは独立できたら…と考える友だちも多いです。私の場合、実家が江戸末期からあり、山内の娘というだけで近所の人が手助けしてくれるような環境で生まれ育ちました。子どもが生まれても会社と一緒に成長していける、いろんなことに挑戦していける場が京都だと思っています。そんなふうに何かあったら頼れるコミュニティをあちこちに広げていくことが大切ではないでしょうか。

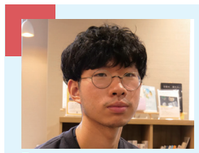
■山本　行政の支援先は99%成功が確実なベンチャーが中心ですが、僕はその役割は金融機関などに任せて、むしろ成功するか分からないが、成功すれば世の中を大きく変えるかもしれない残り1%の学生起業家たちに向けてほしいですね。ベンチャーというのは大学の研究と同じで、日頃の積み重ねの中からパッと瞬間的に生み出されるものだと考えています。起業ではなくても、何かしらのものづくりやアートに携わっている人たちのすそ野を広げていけば、自分もちょっとやってみようという気持ちになって、起業家意識が自然と醸成されていくんじゃないでしょうか。

■宮武　ベンチャーとスモールビジネスを切り分けるべきだと思います。「起業してみたら？」って言われて在学中に起業したけれど、大学を卒業してやっぱりどこかに就職したいとなったとき、キャリアもなければ経験もない…、自分の会社が足かせとなってもう後戻りできないという状況になっています。私は個人事業主として活動していますが、株式会社にしなくても実現できるビジネスはたくさんあるはず。一度挑戦してこれは違うと思ったとき、

参加者

カサイ ダイキ
笠井 大輝さん
大学在学中に笠置町にてジビエ事業等を展開する(株)RE-SOCIALを起業し、運営

スズタ ヤスヒサ
鈴田 泰久さん
シード期の起業家と首都圏の起業家やVCとを繋ぐyasu(株)を運営

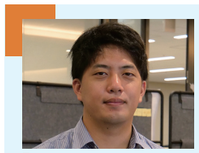


スミガマ マサト
炭竃 昌人さん
「秘密基地こむこむ」や多世代共生型シェアハウス「まいにち家族」等を運営

タナカ チエコ
田中 千恵子さん
「ツーリストシップ」を提唱し、(一社)CHIE-NO-WAの代表理事として活動

ミヤタケ マナミ
宮武 愛海さん
地場の伝統産業の「産廃」を再利用したアクセサリーを販売する「頼 -tano-(sampai)」を運営

ヤマウチ ルカ
山内 瑠華さん
廃棄される野菜を活用し、その魅力を発信する「Lapiz Private」を運営



ヤマモト シュウガ
山本 周雅さん
2019年「語り×BAR Katharsis」を開業後、2020年4月から㈱カタルシスの代表取締役として活動

ユン スヨン
尹 粋娟さん
京都大学大学院で学ぶ留学生で、令和4年度任命の京都府名誉友好大使

ワタナベ タカユキ
渡邊 高行さん
アプリやWeb制作をメインとした事業を行う(株)Gnsを2021年12月から京都で運営